モンゴル語の名詞-動詞型複合動詞[注1]

山越　康裕
(北海道大学大学院)

0.目的

筆者は山越 (forthcoming a) でモンゴル語[注2]の [名詞-名詞] 型複合名詞の分析を行い、音韻面から積極的な定義をすることが困難なモンゴル語の複合語を形態・統語的条件から分析・定義することの有効性について論じた。本稿ではそれを踏まえ、[名詞-動詞 (N-V)] の組み合わせによる固定化された動詞表現を対象に同様の分析・考察をすすめていく。このモンゴル語の[N-V]形式についてはほとんどの先行研究において複合動詞と動詞慣用句とが区別されず、一律に「慣用表現 (Idiom) 」として扱われている。しかし結合の強さは語幹の組み合わせにより異なっていることから、結合度の段階に応じた下位区分を行うことが妥当と思われる。本稿では動詞慣用表現の中で最も形態・統語上の変形を受けにくく、「語」とみなしうる形式を「複合動詞 (Compound verb) 」として認め、「句」としての形式である「慣用句 (Phrasal idiom) 」[注3]との形態・統語上の違いを分析すると共に、[N-V] 複合動詞の生産性、また構成する要素の意味的傾向について論じる。

1.導入：[N−V]の連続する条件

まず、モンゴル語の項関係にある名詞と動詞とが形態上どのような形式であらわれるのかについて概観し、先行する名詞が無標で動詞と連続する条件について、a) 目的語-他動詞、b) 主語-自動詞のそれぞれについてまとめたい。

a) 目的語-他動詞

モンゴル語の直接目的語は対格もしくはゼロ接尾辞をとる。どちらの形式になるのかは特定性、名詞の階層性などが関わっている (山越 forthcoming b) (1) 。

(1)　モンゴル語の直接目的語は、

Ⅰ.通常は Silverstein (1976) の提案する名詞句階層において上位の名詞、特に人物名詞以上の名詞の場合には対格接尾辞を取る。

代名詞>固有名詞>人物名詞　>　　動物名詞>具象名詞>抽象名詞

		対格	/		ゼロ	
Bat	Yamakoš-iig	zod-son.	←→	Bat	noxoi-ø	zod-son.
人名(nom)	人名-acc	殴る-pf.n		人名	犬-ø	殴る-pf.n
バトはヤマコシを殴った。					バトは犬を殴った。	

Ⅱ.無生物名詞が主語になる場合、階層上主語と同位、もしくは上位に位置する名詞は対格接尾辞をとりやすくなる。

(e.g. 具象名詞が主語の場合)

代名詞>固有名詞>人物名詞>動物名詞>具象名詞 > 抽象名詞

対格 / ゼロ

zeb	tömör-iig	id-sen.
錆(nom)	鉄-acc	食べる-pf.n

錆が鉄を食べた (鉄が錆びた) 。

Ⅲ.限定修飾を受けている場合や文脈上同定可能な対象の場合には対格接尾辞をとる。また、直接目的語が動詞に隣接していない場合にも対格接尾辞をとる。

mal	us-ø	uu-b.	←→	mal	ter	us-iig	uu-b.
家畜	水	飲む-pst		家畜	その	水-acc	飲む-pst
家畜が水を飲んだ。				家畜がその水を飲んだ。			

ix	malgai-g	ta	ab-yi	gej	bai-na	uu ?
大きい	帽子-acc	2.nom	買う-vol	という	ある-pr	Int

大きい帽子をあなたは買うつもりですか？ [以上、山越 (forthcoming b)より]

山越 (forthcoming b) では割愛したが、目的語は再帰所有接尾辞もとる (2) 。

(2)

Bat	önöödör	üzg-ee	mart-ǰee.
人名	今日	ペン-ref	忘れる-pf

バトは今日、自分のペンを忘れてしまった。 [Kullmann (1996:111)]

再帰所有接尾辞は主語の所有物である場合に接続される。対格接尾辞と共起することもあるが、その場合にも名詞句階層が関係している (Kullmann 1996:111) とされ、階層の低い名詞の場合には特定性に関わらず対格は要求されない (3) (4) 。

(3)

či	Dorǰ-oo / Dorǰ-iig-oo	ab-aad	yab-aarai.
2.sg.nom	人名-ref / 人名-acc-ref	持つ-pf.c	行く-dem

君は(君の)ドルジを連れて行ってくれ。

(4) či ene xog-oo / *xog-iig-oo ab-aarai.
2.sg.nom この ゴミ-ref / *ゴミ-acc-ref 持つ-dem
君のこのゴミを持ってってくれ。 [(3) (4) Kullmann (1996:111)]

以上から、目的語が無標（ゼロ接尾辞）となる条件は下記 A) のようにまとめられる。

A) 目的語が無標となる条件

①限定をうけていない、

②名詞句階層において少なくとも動物名詞よりも低い位置にある、

③主語の所有物でない、

④動詞の直前に置かれる

特に目的語が②、もしくは③の条件を満たさない（名詞句階層の高い位置にある、もしくは主語の所有物であるような目的語）にも関わらず、対格接尾辞をとらない場合には統語的な変形を受けにくい、動詞との結合が強い固定的な表現であることが予測される。

b)主語-自動詞

モンゴル語の NV が他の成分の介入無しに連続する形式としてはもう一つ、主語-自動詞という組み合わせが考えられる。

いわゆる対格型言語であるモンゴル語の場合、主語は一般に接尾辞を伴わない主格であらわされる。基本語順が SOV であり、副詞句は一般には目的語成分と同じく主語と動詞の間に位置するのが安定した語順であるため、SVのみの簡単な表現(5)、もしくは補語成分を強調した表現 (6) の場合に主語と自動詞は無標で連続する。

(5) boroo or-jee. 雨が降った。
雨 入る-pf

(6) Ulaanbaatar-t bagsh oč-son. ウランバートルに先生が着いた。
ウランバートル-dat 先生 着く-pf.n

ただし主題として主語を取り立てる場合には主語の直後に小辞が置かれるため、動詞とは隣接しない (7) 。

(7) či　　čin　　galzuura-b　　uu?
2.sg.nom　　←2.sg.pt　　狂う-pst　　Int
あんた、気でも狂ったか？　　[Ojdov (1966:128)]

また、主語-自動詞が従属節 (名詞修飾節、もしくは名詞節も含む) になる際、節の主語は主文の主語と異なる場合に対格または属格をとることが多い (8) (9) 。

(8) Dorǰ-iig　　ir-tel　　Galt　Donoi-g　　xulee-ǰ　　bai-laa.
人名-acc　　来る-trm　　人名　人名-acc　　待つ-im.c　　いる-pst
ドルジが来るまでガルトはドノイを待った。　　[水野 (1993:3)]

(9) Dorǰ-iin　　üx-sn-iig　　či　　sonso-b　　uu?
人名-gen　　死ぬ-pf.n-acc　　2.sg.nom　　聞く-pst　　Int
ドルジが死んだのを君は聞いた？　　[アラタ氏]

従属節主語の格選択は、同じく Silverstein (1976) の名詞句階層の関与 (水野 1988, 1993)、対比関係や動詞の形態、格の重複の回避など「複雑な要因がからみあって形式が決定される」(水野 1995:677) とされており一般化は難しい。

以上より、主語-自動詞の関係が無標で連続する条件は B) のようにまとめられる。

B) 主語が無標で自動詞と連続する条件

①主節をつくる

②主語が主題化の作用を受けない

なお、モンゴル語の自動詞文で主語以外の名詞が無標形で現れることは、日時などをあらわす副詞的用法を除いて一般には無い。

2. [N-V]慣用句と複合動詞の例

名詞と動詞のペアによる慣用表現は圧倒的に目的語-他動詞という形式が多く、一部に主語-自動詞型もみられる。このような慣用表現は、1.A)、B)で見た条件に応じて名詞に接尾辞が選択されることがあるため、辞書の見出しでは一般に接尾辞を伴わない形式で表記される (10) (11) 。

(10) yas　bari-　　最期を看取る、跡を継ぐ
骨　つかむ

(11) gar　xara-　　世話をさせる

手　　見る　　[(10) (11) Akim (1999)]

先行研究ではこの形式を一律に慣用表現と認め、「複合動詞」を特に区別していない (Luvsanvandan 1966, Dondukov et al.1985, Kullmann 1996) 。これら先行研究ではモンゴル語の複合語としては複合名詞・複合形容詞を認めるのみで、動詞についての言及は無い。しかし複合動詞を認めている先行研究もわずかながらある。その一つとして一ノ瀬 (1992) があげられる。

一ノ瀬 (1992) では音節構造が単語連続の場合と異なっていることを根拠に、(12) が複合語であるとしている (ただし、音節構造の改変は後部要素(動詞)が母音はじまりの場合に限られるため、すべてに適用できる条件ではない) 。

(12)　a.m al.da-　　(単語連続の場合は　am . al.da-「失言する」)
　　口　失う
　　約束する　　[一ノ瀬 (1992:114)]

また、それと同時に形態面でも (10) (11) と (12) では違いがあることから、複合動詞の存在を認めることができる。

(10)'　**yas**-iig min　**bari**-x　xüü　šüü　dee,　či.
　　骨-acc ←1.sg.pt　つかむ-pr.n　息子　mod　mod,　2.sg.nom
　　私の跡を継ぐ (私の骨をつかむ) 息子なんだぞ、お前は。　[Akim (1999:203)]

(11)'　övgön-d tüün-ii　**gar**-iig　**xara**-x-aas　öör　arga　bai-san-güi.
　　老人-dat 3.sg-gen 手-acc　見る-pr.n-abl　他の　方法　ある-pf.n-neg
　　老人に彼の面倒を見させる (彼の手を見る) しかなかった。[Akim (1999:46)]

(12)'　"xorin　xoyor　tsag"　ge-ed　**am**-ø/*am-aa　**ald**-čix-san　ene
　　"20　2　時"　と言う-pf.c　口-ø/ *口-ref　失う-im-pf.n　この
　　erxem　komuniist　odoo　xaaš　bulta-ǰ　zaila-x　be
　　親愛な　共産主義者　今　どこへ　逃げる-im.c　避ける-pr.n　Int
　　ge-ǰ　bod-no.
　　と言う-im.c　考える-pr
　　「22時」と約束した ([*自分の]口を失った) この親愛なるコミュニストは今どこに逃げ隠れているのか、と思案する。　[Akim (1999:16)]

慣用句 (10)' (11)' は語の緊密性が弱く、1. A) ①～④ の規則を満たさない限り目的語

要素は対格接尾辞を要求する。一方複合動詞 (12)' は再帰所有接尾辞の介入を許さない。

両者の中間的位置にある例もある (13) (14)。

(13) nüd nee- ([目 開ける]・・わからせる、わかる)

uxuula-x　xuudas oln-ii　**nüd**-ø/ ?? nüd-iig　**nee**-ǰ,....
説明する-pr.n　紙　多い-gen→　目-ø/ ??目-acc　開ける-im.c
アジビラが大衆を目覚めさせ (大勢の目を開かせ)....　[Akim (1999:89)]

(14) bögs doloo- ([尻 舐める]・・媚びへつらう)

ter　xün　ug-aas-aa　xün-ii　**bögs**-ø / ?? bögs-iig　**doloo**-x
あの　人　本来-abl-ref　人-gen→尻-ø / ?? 尻-acc　舐める-pr.n
xün　biš.
人　Neg
あの人はもともと人に媚びる (人の尻を舐める) ような人ではない。

[Akim (1999:35)]

(13) (14) は目的語要素が限定修飾を受けているが対格が接続しておらず、両者の結合が (10) (11) にくらべ緊密であるといえる[注1]。しかし、限定修飾は目的語のみにかかっており、「語の一部分を外部から修飾することはできない」(影山 1993:11) という「語」の特徴に反するため、これらは「複合動詞」とは認められず、それぞれの要素が独立性を保っている「慣用句」であると位置付けられる。

以上見たように、名詞と直後の動詞との緊密性の強さの違いから「複合語」と「慣用句」とを見分けられるといえる。

3. 用例分析の手順

(10)-(14) のような N-V の組み合わせに限らずモンゴル語の様々な形式の慣用表現をまとめたものに『モンゴル語慣用表現辞典』(Akim 1999) がある。小説等のテキストから収集した例文も提示しており用例分析に有効であるため、この辞典から慣用表現を収集した。なお当辞典は通常の辞書が接尾辞のない形式で見出しをたてるのとは異なり、必ず対格もしくは再帰所有接尾辞を伴う表現は見出し語に接尾辞付きの形式で掲載している (15) (16)。

(15)　zürx-iig bulaa- ([心臓-acc 奪う]・・夢中にさせる)

zürx-iig	min'	**bulaa**-san	xairtai	xongor
心臓-acc	←1.sg.pt	奪う-pf.n	愛する(A)	愛しい(A)
Yanǰmaa-g-aa	gergii-g-ee	bolgo-od	suu-na	daa.
人名-acc-ref	妻-e-ref	～にする-pf.c	住む-pr	mod

僕を夢中にさせた (僕の心を奪った) 愛しの僕のヤンジマーを僕の妻にして暮らすんだ。

[Akim (1999:70)]

(16)　šüls-ee zalgi- ([つば-ref 飲み込む]・・欲しくなる)

ter šunaltan-g-uud	xar-aad	**šüls-ee** / ?? šüls-ø	**zalgi**-x
あの 欲張り-e-pl	見る-pf.c	つば-ref / ?? つば-ø	飲み込む-pr.n

bol-no.
~になる-pr

あの欲張りどもが見て欲しくなる (自分のつばを飲む) だろう。

[Akim (1999:192)]

収集にあたっては (15) (16) のような接尾辞の固定した用例、補助動詞 (もしくはコピュラ) に分類されるbai- (~だ、ある、いる)、 bol- (～になる)、 xür- (～に到る) などと名詞との組み合わせおよびコンサルタントが知らなかった用例を除き、残った178例について分析を行った[注5]。

なおトルコ語の目的語と動詞との結合度について分析した Kuribayashi(1989) は、主語と目的語との位置の転換・代名詞化・目的語要素の省略・副詞による動詞修飾・形容詞による目的語修飾・挿入という６項目の変形操作を行い、Compound > Idiom > Object-Incorporation > NVという順に結合が弱くなることを述べている (CompoundとIdiomはアクセント核の数によって区別されるという)[注6]。本稿では Kuribayashi (1989) の分析と1.A)、B)の [N-V] の無標連続の条件を参考に、各用例について変形操作が可能かどうか、Akim (1999) 記載の例文およびコンサルタントからの情報をもとに分析した。

4.用例分析の結果

用例分析の過程で、以下のような傾向が明らかとなった。

ｉ.意味的特徴

傾向として名詞には身体部分を示す名詞が多い (全178例のうち112例)。

まず慣用表現全体についてだが、主語、もしくは目的語要素となる名詞には身体

部分名称が多く用いられている。用いられた名詞には次のようなものがあった。なお[ ]内は用例の数を示す(1例のみの例については[ ]を省いた)。

身体部位：手 (gar) [13]、目 (nüd) [12]、口 (am) [7]、頭 (tolgoi) [7]、顔、顔面 (nüür, tsarai) [6] 、心臓 (zürx) [5]、尻尾 (süül) [5]、骨 (yas) [5]、鼻、鼻先 (xamar, xošuu) [4]、肝臓 (eleg) [4]、足 (xöl) [3]、胆のう (tsös) [3]、ふくらはぎ (šiir) [3]、胸 (tseeĭ) [3]、耳 (čix) [2]、舌 (xel) [2]、腿 (guya) [2]、足の裏 (ul)、尻 (bögs)、肩甲骨 (dal)、アキレス腱 (borbi)、筋 (šörmös)、手のひら (alga)、腹 (gedes)、弁髪(güzee)、額(magnai)、ひざ(öbdög)、すね(ölmii)、みぞおち(ör)、魂(süns)、腰の側面[注7] (tašaa)、ひづめ(tuurai)、関節(üye)、髪(üs)、首(xüzüü)、へそ(xüis)、下唇 (šazuur)、歯 (süd)、耳あか (xulx)、 つば (süls)。

その他関連するものとして年齢(nas)[5]、足跡(mör)[2]、言葉(üg)[2]、呼吸(am'sgaa)[2]、知恵(uxaan)、力(xüč)などの属性を示す名詞や衣類・衣類の一部であるすそ(enger)[2]、そで(xantsui)、ズボン(ömd)といった名詞も用いられている。これらの名詞は分離可能性の強さを示す「所有傾斜」(角田 1991:119) のうち、分離不可能な所有物にあたるもので、全収集例のうちの約八割を占めた。なお対象から除外した(15)(16)のような接尾辞付きの用例にも多数身体部分名称が用いられている。

ii.形態・統語的特徴

「複合動詞」とは認められず「慣用句」として用いられるものが圧倒的 (178例のうち167例) である。

(13)(14)と同様、語の介入、接辞の添加などが自由な例＝「慣用句」として機能している用例が多かった。コンサルタントが作った例文にもごく自然に小辞の挿入(17)、再帰接尾辞の添加 (18) が見られる表現が多く、結合度は低い。

(17) čix tabi- ([耳 置く]・・聞き耳を立てる)

tüün-ii	tuxai	**čix**	n'	**tabi**-n	sons-ǰee.
3.sg.-gen	について	耳	←3.pt	置く-md.c	聞く-pf

そのことについて (その) 聞き耳を立てて (耳を置いて) 聞いた。[アラタ氏]

(18) tsarai ald- ([顔面 失う]・・血の気が失せる、青くなる)

ter-iig	üz-eed	bi	**tsarai**-g-aa	**ald**-čix-ǰee.
3.sg-acc	見る-pf.c	1.sg.nom	顔面-e-ref	失う-in-pf

それを見て私は青くなった (自分の顔面を失った)。　　[アラタ氏]

なお、慣用句は小辞や接尾辞は自由に接続するものの、より大きな単位である語の介入には用例によって差があり、比較的制約を受けやすいようである (17)' (18)' (19) 。

(17)'	*tüün-ii	tuxai	**čix**-iig	ter	**tabi**-n	sons-ǰee.
	3.sg-gen	について	耳-acc	3.sg.nom	置く-md.c	聞く-pf

「主語の挿入は不可」[アラタ氏]

(18)'	??ter-iig	üz-eed	**tsarai**-g-aa	bi	**ald**-čix-ǰee.
	3.sg-acc	見る-pf.c	顔面-e-ref	1.sg.nom	失う-in-pf

「意味が正確に伝わらない」[アラタ氏]

(19)	darg-iin	**bōgs**-iig	ter	**doloo**-x	dur-tai.
	長-gen	尻-acc	3.sg.nom	舐める-pr.n	好み-pos

上官の尻をあいつは舐めるのが好きなんだ。　　[アラタンボリゴ氏]
「可」[アラタ氏、アラタンボリゴ氏]

また、山越 (forthcoming a) で複合名詞の分析に用いた重複法[注8] は (12) のような複合動詞でも全体が一つの単位としてとらえられ重複 (NV *NV*) するのではなく名詞要素のみが重複 (N *N* V) するという回答を得た。通常の単語連続では動詞要素の重複 (NV *V*) も許容されるが、結合が緊密なものは動詞要素の重複は不可とのことだった。しかし、慣用句の場合にも動詞要素の重複は許容度が下がるという (20) 。そのため、この重複法は単語連続と慣用表現との境界を見る手段として用いることができるが、複合動詞の判別には適さないといえる。

(20)複合動詞

N*N*V/	**am**	*mam*	**alda-**
	口	*口*	失う-

約束したりする

NV*V*/	***am**	**alda**-ǰ	*malda-*	NV*NV*/	***am alda**-ǰ	*mam alda-*
	口	失う-im.c	失う-		約束する-im.c	*約束する*

動詞慣用句

N*N*V/	**tsarai**	*marai*	**alda-**
	顔面	*顔面*	失う

青くなったりする

NV*V*/ ??**tsarai alda**-ǰ　*malda-*
顔面　失う-im.c　失う

NV*NV*/ ***tsarai alda**-ǰ　*marai alda-*
青くなる-im.c　青くなる

単語連続

N*N*V/ nom　*mom*　unši-
本(O)　本　読む-
本などを読む

NV*V*/ nom　unši-ǰ　*munši-*
本　読む-im.c　*読む-*
本を読んだりする

NV*NV*/ *nom　unši-ǰ　*mom*　*unši-*
本　読む-im.c　*本*　*読む-*
[アラタ氏]

iii. 複合動詞の自他

語の結合が強く、「複合動詞」と認められる組み合わせ (11例) は目的語-他動詞から全体で自動詞化 ([O-Vt]Vi) するもの (12)' (21) が典型だが、中には目的語-他動詞から新たに目的語をとって他動詞化 (O [O-Vt]Vt) する例 (22)、主語-自動詞から別の主語をとって自動詞化 (S [S-Vi]Vi) する例 (23) もあった。

(21)　zürx alda- ([心臓 失う]・・怖がる)

zagn-uul-saar　tüšmed　zargač-iin-d　oči-x-oos　**zürx**
どなる-cau-cnt 役人たち　引き継ぎ-gen-dat　行く-pr.n-abl 心臓

alda-ǰ　xen　maan'　oči-x　be　ge-ǰ
失う-im.c　誰　←1.pl.pt　行く-pr.n　Int.　と言う-im.c

šod-dog　bol-ǰee.
くじを引く-hbt　~になる-pf

どなられ続けて、役人たちは引き継ぎのところに行くのをこわがって「俺たちの誰が行こうか？」とくじ引きになった。　[Akim (1999:68)]

(22)　zürx garga- ([心臓 出す]・・目論む、志す)

Bogd-iin　xüiten　xarts-iig　**zürx**　**garga**-zh,...
聖王-gen　冷たい 眼差し-acc　心臓　出す-im.c
聖王の鋭い眼差しを志して...　[Akim (1999:69)]

(23)　ör öbdö- ([みぞおち 痛む]・・心配する、がっかりする)

či　yuun-d **ōr**　**ōbdō**-ǰ　bai-na ?
2.sg　何-dat　みぞおち　痛む-im.c　ある-pr
お前は何でがっかりしてるんだ？　[アラタ氏]

また、これらの結合が強い例に用いられた名詞要素は「馬」(24)を除いて全て身体部分を表すものだった：目[3]、口[2]、心臓[2]、腿、みぞおち、腰の側面、馬。

(24) mor' xara- ([馬 見る]・・(男性が) 小便する、小便をしに外に出る)

bi	odoo	**mor'**	**xar**-yi.
1.sg.nom	今	馬	見る-vol

ちょっと小便して (馬を見て) くる。 [アラタ氏]

iv.複合動詞内部は再帰的 (中動態的) な用法に限られる。

(10)' (11)' (13) (14) のような「慣用句」の例文と (12)' (21) (22) (23) の「複合動詞」の例文を比べてみると、同じ身体部分を構成要素に持ちながら「慣用句」の例文では文の主語以外の人間の身体部分を、「複合動詞」の例文は主語(もしくは動作主)自身の身体部分を示していることがわかる。「慣用句」の中にも (18) のような再帰的な表現は数多くあるが、逆に「複合動詞」にはほとんど例外が無い。収集例のうち、「複合動詞」の再帰性に疑問が残る例は (24) と次の (25) の2例であった。

(25) am bulaa-lda- ([口 奪う-rcp-]・・我先にしゃべりだす)

emč-iig	asuu-x-ad	sergelen-g-iin	etseg	ex	**am**
医者-acc	尋ねる-pr.n-dat.	セルゲレン-e-gen	父	母	口

bulaa-lda-n	yari-b.
奪う-rcp-md.c	話す-pst

医者が尋ねるとセルゲレンの両親は我先に (口を奪い合って) 話しだした。

[Akim (1999:17)]

ただし、(24) の場合は「馬」が主語の所有物であることは明らかであり、身体部分ではないものの心理的には自分自身と一体の存在としてとらえればやはり中動態に類する構文といえないだろうか。また、(25) については「口」は他者の所有物であるが、相互態接尾辞/-lda/のない場合 (25)' には意味が通じないという回答を得ている。

(25)' *etseg am bulaa-n yari-b.

父	口	奪う-md.c	話す-pst

*父は口を奪って話しだした。 [アラタ氏]

これは相互態が用いられることで複数の主語の動作が別の主語にそれぞれ及ぶ(26)ため、結果として再帰的表現となっていると解釈できる。

(26) / (25)の動作の方向

動作主		奪う対象
父	⇨	母の口
母	⇨	父の口

5. まとめ

[N-V]連続の複合動詞形成は形態・統語論的観点からその存在を認めることができるといえる。ただしその生産性は低く、一般に[N-V]形式は意味の特殊化が起こっていても1.A)、B)の条件に応じて接尾辞の添加、小辞の挿入などが自由に行われることからそれぞれの語が独立性を保っているといえよう。本稿ではそのような組み合わせを「慣用句」として位置づけたが、この「慣用句」も単なる単語連続に比べると (19) (20) のように結合度の強さを示す現象が見られる。これらの結果をまとめると[N-V]形式は(27)のようにレベル分けできる。

(27) 結合の強さと意味の特殊化によるレベル分け

	単なる単語連続 <=>	慣用句 <=>	複合動詞
意味の特殊化	無し	有り	有り
(20)重複法	N,Vどちらも可	V重複は不自然	V重複は不可
(19)他の語の介入	可	制約あり	不可
接辞,小辞の添加	可	可	不可

さらに、複合動詞になりうる組み合わせは、動作が自分自身(の一部)に返ってくる再帰的表現に限られるという興味深い結果が得られた。

略号一覧

A 形容詞　Int 疑問詞　N 名詞　Neg 否定詞　V 動詞　1.2.3 人称
abl 奪格　acc 対格　cau 使役態　cnt 継続副動詞　dat 与位格
dem 依頼定動詞　gen 属格　hbt 習慣形動詞　im.c 未完了副動詞
md.c 法副動詞　mod 法小辞　neg 否定接尾辞　nom 主格　pf 完了定動詞
pf.c 完了副動詞　pf.n 完了形動詞　pl 複数　pr 現在定動詞　pr.n 現在形動詞

pst 過去定動詞　pt 人称小辞　　ref 再帰所有　　rcp 相互態　　sg 単数
trm 限界副動詞　vol 意志定動詞

注

[注1] 本稿は平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A)「中国東北部およびロシア極東のツングース諸語に関する緊急調査」(代表者　津曲敏郎) の助成による研究成果の一部である。執筆にあたっては北海道大学の津曲敏郎教授より有益なご助言をいただいた。また、コンサルタントとしてアラタ氏 (Alta / 阿拉騰、内蒙古自治区烏蘭察布盟察哈爾右翼前旗出身、チャハル方言話者) 、アラタンボリゴ氏 (Altanbulag / 阿拉坦宝力格、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗出身、バーリン方言話者) 両氏に御協力いただいた。以上の方々に改めて感謝したい。なお、当然のことながら本稿における不備、誤謬は全て筆者が責任を負うものである。

[注2] 本稿ではモンゴル国で使用されるハルハ方言をもとにしたテクストより用例を収集し、それについて別の方言話者である内蒙古自治区出身のコンサルタントよりチェックを受けた。方言差は論旨に影響しないという判断による。なお例文の表記はハルハ方言に基づいた音韻表記である。

[注3] 本稿では「慣用表現」を意味の特殊化を受けた表現全般を指し、その下位区分に「句」的な表現である「慣用句」、「語」的な表現である「複合語」の二つを設定し、それぞれ区別して用いることとする。

[注4] ただし、(14) のbögs doloo-は (19) のように対格接尾辞のついた形もみられるため、結合が緊密とは言い切れない。

[注5] コピュラ、補助動詞の場合は主語、補語要素がともに格接尾辞、再帰接尾辞、人称小辞をとらず、判断が困難なために除外した。Akim (1999) はハルハ方言をもとに編纂された辞典であり、コンサルタントの両氏は別の方言話者のため、より正しい判断を求めるために両氏の知っている表現についてのみ回答を得た。

[注6] Kuribayashi (1989) はIdiomを結合が強く変化を受けないものとして取り扱っている。本稿で筆者が用いる「慣用句」はこれと異なり、各語彙の組み合わせにより意味の特殊化を受けていながら接尾辞の添加、別の要素の介入を許し構成する語彙の語としての独立性が保たれているものを指す。

[注7] コンサルタントによれば、骨盤下部あたりの両脇(足の付け根の外側)を指すという。デール (モンゴル服) を着る際にナイフ、小物等をこの位置にぶら下げる。

[注8] 対象となる語(W)の語頭子音を置換した要素(*W*)を重複する用法である。ハルハ方言での規則は以下の通りである。

1.語頭子音が/m/の語	/m/が/z/に置換	e.g.	mod (木)	mod *zod* (木など)
2.その他の子音/C/	/C/が/m/に置換	e.g.	nom (本)	nom *mom* (本など)
3.母音で始まる語	/m/を添加	e.g.	am (口)	am *mam* (口など)

他の方言では1.の規則に若干違いが見られ、また語彙的な重複形も散見する。

動詞が重複される(V*V*)場合、先行する動詞(V)は完了副動詞接尾辞/-j~č/をとり[V-j　*V*-]という形式となる(Kubo 1997:72)。

e.g.　ab-aad　(買って)　　red. ab-č　　*mab*-aad...　(買ったりして)
　　買う-pf.c　　買う-im.c　買う-pf.c

なお本稿では重複要素とそのグロスをイタリック体で表示した。

参考文献

Akim, Gotovyn (1999) *Mongol övörmöc xelcijn tajlbar tol'.* Ulaanbaatar, "INTERPRESS" xeblelijn kompani.

Dondukov, U. Zh. , G. Zhambalsüren , B. Sum"jaabaatar. (ed.) (1985) *Orchin cagijn Mongol xelnij ügsijn sangijn südlalyn ündes.* Ulaanbaatar, ShUA-ijn xel zoxiolijn xüreelen.

一ノ瀬恵 (1992a) 「モンゴル語の複合語の音韻的特徴」 『北方文化研究』 第21号:105-119.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京, ひつじ書房.

Kubo, Tomoyuki (1997) "*Reduplication Meduplication* in Khalkha Mongolian." 『言語研究』No.112:66-97.

Kullmann, Rita (1996) *Mongolian Grammar.* Hongkong, Jensco, ltd.

Kuribayashi, Yuu (1989) "Accusative Marking and Noun-Verb Constructions in Turkish." 『言語研究』No.95:94-119.

Luvsanvandan, Sh. (ed.) (1966) *Orchin cagijn Mongol xel züj.* Ulaanbaatar, Ulsyn xevlelijn xereg erxlex xoroo.

水野正規 (1988) 「モンゴル語の従属節の主語にあらわれる対格形について」 『東京大学言語学論集'88』:293-300.

――― (1993) 「現代モンゴル語文法研究の問題点」 『日本モンゴル学会紀要』No. 24:1-10.

――― (1995) 「現代モンゴル語の従属節主語における格選択」 『東京大学言語学論集』第14号:667-680.

Ojdov, Ch. (1966) "Zam." (小沢重男 訳『道』), 東京, 大学書林.

Silverstein, Michael (1976)"Hierarchy of features and ergativity." *Grammatical Categories in Australian Languages.* (Dixon, R.M.W. ed.) : 112-171. Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies.

角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京, くろしお出版.

山越康裕 (forthcoming a) 「語形成論から見るモンゴル語の名詞結合」 『日本モンゴル学会紀要』 (日本モンゴル学会編) 第31号, 2001年3月刊行予定.

山越康裕 (forthcoming b) 「モンゴル語の直接目的語の格選択にみられる名詞句階層」 "ALTAI HAKPO" (アルタイ学報;韓国アルタイ学会編) No.11, 2001年6月

刊行予定.

[Noun-Verb] Compound Verbs in Modern Mongolian

Yasuhiro YAMAKOSHI
(Graduate School , Hokkaido University)

Modern Mongolian has many idiomatic Noun-Verb combinations like [Object+Transitive verb (O-Vt)] and [Subject+Intransitive verb (S-Vi)]. These phrases are all named as “Idiom” or “Idiomatic phrases”, and distinguished from ordinary N-V phrases (Ord. N-V) by their specialization of meaning. There are, however, several N-V combinations which can be regarded as “Compound verb” among these "Idioms", in a few cases, with a resyllabification. We can recognize such combinations as compound verbs also from their morpho-syntactic features.

Therefore, consultants and I made an analysis in relation to syntactic frozeness between N and V. From the analysis, we made it clear that N-V combinations had at least 3 levels : Ord. N-V, Phrasal idiom (PI), Compound verb (CV). Each level has features as below .

	Ord.N-V <=>	PI <=>	CV
Specialization of meaning	×	○	○
Reduplication(N*N*V, NV*V*)	○	?NV*V*	*NV*V*
Inserting another word between N and V	○	△	×
Addition of any suffix or particle to N	○	○	×

Furthermore, these CVs share the features that N is a part of the agent’s body and behaves as a reflexive object.